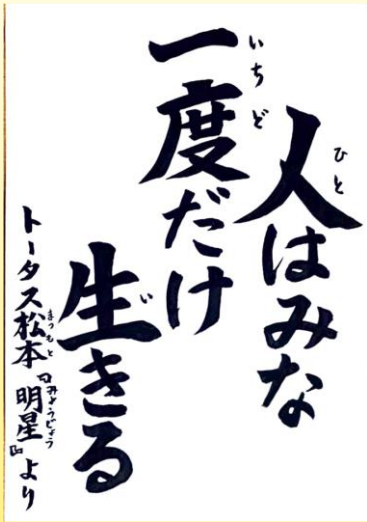
今月のことば



ウルフルズのボーカル、トータス松本さんの『明星』の歌詞です。
当たり前のことですが、誰もがみな一度きりの人生を生きている。そう思ってみると、いつもと同じような朝も、何もない一日も、何気ない会話さえも、大切な一度しかない今なのかもしれません。

INFORMATION

7　月　公　開　同　朋　会

7月8日（第二土曜日）
13：00～15：30
入場無料

①勤行
②住職・前住職法話
③エレクトーン奏者
　sono　ミニコンサート
　「情熱大陸」他
④茶話会

毎年7月に開催している公開同朋会。
　今年はご門徒さんのご紹介でエレクトーン奏者 sono さんをお招きして、ミニコンサートを行います。誰もが一度は耳にしたことがある曲や懐かしのメロディーなど、エレクトーン一台で多彩な音楽が繰り広げられます。
　終了後は sono さんを囲んでお茶飲み会も行います。ぜひお越しください。

境　内　の　花　々

ドクダミ（八重咲）

ぼうもりのひとりごと

石原先生が対談の中で「会話は未来志向で」と話されました。「昨日何食べた？」より「今日何食べたい？」の方が会話が弾むのだそうです。暗い気持ちになりがちですが、一人一人がこれからを楽しみに生きることが明るい未来につながるのかもしれません。

六月同朋会より

住職法話「私をうつす鏡」

私たちは自分の姿を見ることはできません。ではどうやって見るか、鏡に映してみるのです。善導大師という中国のお坊さんは『観経疏』という書物のなかで「経教はこれを喩（たと）うるに鏡（かがみ）のごとし」と言っています。教えの書いてある経は鏡のようだ。私たちは時々鏡に映さないと自分の姿に気づかない。仏の教えとは私の姿を教えてくれる鏡だというのです。

お内仏に手を合わせるとき、ご本尊の阿弥陀如来を真ん中に、脇には亡き人の法名の書かれた軸を掲げて手を合わせます。それは亡き方を傍らで思いながらまっすぐに仏の前に座って仏と向き合い、私の姿に出遇わせてもらうのです。

前住職法話「倶会一處（くえいっしょ）ということ」

徳泉寺の共同墓地「無量寿苑」には「倶会一處」と書かれています。これは倶（とも）に一つの處（ところ）で会うという意味で浄土にともに生まれたいという阿弥陀の願いをあらわした言葉です。しかし、私たちはこの「ともに」というのがとても難しい。先日、新聞に「定年クライシス」という連載がありました。そこには退職後、妻に「週に3日は外に出て欲しい」と言われて四苦八苦する夫のことが書いてありましたが、実は私がスクラップしていた1998年の新聞記事にも「夫の退職で息詰まる」という同様の記事があったのです。私たちはどうしても自分中心で、自分にとって都合のいいものは受けとめ、一方で都合に合わない現実にあってすごく苦労する。祖霊信仰も同じです。「あの世でどうか幸せになって私たちをお見守りください。」と手を合わせますが、その中に（決して私たちに祟らないでください）という自分勝手な思いがありませんか。これは本当に亡くなった方への供養になるのでしょうか。